

# 経営思想の源流を求めて\*

## ——L. J. ヘンダーソンのパレート社会学との出会い——

吉原 正彦\*

第1節 はじめに

第2節 パレート社会学との出会い

第3節 パレート社会学啓蒙への一歩

第4節 科学方法における事実と感情

第5節 人間行動への科学的接近

第6節 結びにかえて

### 第1節 はじめに

1930年代のハーバード、そこには“Harvard Circle”<sup>1)</sup>と称される科学者集団が形成され、さまざまな分野において時代を画する多くの成果が生み出された。経営学においても、人間関係論、そしてバーナード理論が創り出されたことは周知の事実である。その“Harvard Circle”を形成した科学者たちのなかで中核的役割を果たした人物、それがローレンス・J・ヘンダーソン (Lawrence Joseph Henderson 1878-1942) であった<sup>2)</sup>。生理学および生化学の研究者として世界的に著名であった彼は、パレート社会学と出会い、その晩年は、精力的に社会科学の構築に努力を傾けた。その努力の結実が人間関係論でありバーナード理論であり、その基礎としての人と人が織りなす世界の科学的構築であった。

本稿では、1930年代の“Harvard Circle”に共有されているパラダイムを解明すべく、その出発点として、ヘンダーソンがヴィルフред・パレート (Vilfred Pareto 1848-1923) に出会った経過を明らかに

\* 本稿は、千葉商科大学から1991年より1年間の在外研究の機会を与えられ、客員研究員としてハーバード大学ビジネス・スクールのベイカー・ライブラリー・アーカイヴス (Baker Library Archives) を中心に収集した資料に基づいている。大変遅れたけれども、こうした機会を与えられ、自由な研究ができたことに深く感謝する。

- 1) “Harvard Circle”とは、W. G. スコットの命名である。スコットは、この“Circle”に関係する科学者をマネジメントに関わりを持った人びとに限定をしているが、本稿では、もう少し広い範囲で用いている。“Harvard Circle”を形成した科学者として、ヘンダーソンの他に、たとえば、A. N. ホワイトヘッド、T. パーソンス、G. C. ホーマンズ、R. K. マートン、C. プリントン、J. A. シュンペーター、F. クルックホーン、C. I. バーナード、E. メイヨー、F. レスリスバーガー、T. N. ホワイトヘッドなどを挙げておこう。なお、B. S. ヘイルは、1930年代から1940年代初めのハーバードにおけるヘンダーソン、ホーマンズ、プリントン、パーソンスの知的交流を“Pareto Circle”と称しているが、“Pareto”と表現するには、当時の状況を十分に示すことができないと考えられるので、本稿では、“Harvard Circle”と称することとする。William G. Scott, *Chester I. Barnard and the Guardians of the Managerial State*, University Press of Kansas, 1992. p. 41. Barbara S. Heyl, “The Harvard ‘Pareto Circle,’” *Journal of the History of Behavioral Sciences*, Vol. IX, No. 4, Oct. 1968. pp. 316-334.
- 2) ヘンダーソンの人となり、業績については、次を参照のこと。吉原正彦「L. J. ヘンダーソン研究序説：ハーバードにおける活動の軌跡」『千葉商大論叢』第14巻・第3号、1976年12月、239-266頁。最近のものとしては、John Parascandola, “L. J. Henderson and the Mutual Dependence of Variables: From Physical Chemistry to Pareto,” *Science at Harvard University: Historical Perspectives*, edited by Clark A. Elliott and Margaret W. Rossiter, Associated University Press, 1992. pp. 167-190.

し、パレートが著した『一般社会学概論』<sup>3)</sup>に対して彼が注目したものを浮き彫りにすることにある。

## 第2節 パレート社会学との出会い

人間のめぐり会いは、時として何の前触れもなく、突然と訪れるものである。ヘンダーソンとパレートとの出会いもまた、そのようであった。

ヘンダーソンがパレートの『一般社会学概論』に出会うことがなかったならば、1930年代のハーバードに科学者集団が形成され、一つのパラダイムが、そして人間関係論やバーナード理論が生まれたかは疑問であるといえよう。

ヘンダーソンがパレートにめぐり会ったのは、1927年<sup>4)</sup>のことである。彼は、その出会いについて、友人に宛てた書簡のなかで次のように回顧している<sup>5)</sup>。

...わたくしを“Paretian career”へと旅立たせたのは、ウィーラーでした。10年ほど前のある日の夕方、私がたまたま彼のところに立ち寄り、しばらく話をした後で、彼は二巻からなる大きな書物を見せて、「これを、きみにあげたいのだが」といいました。それはパレート

3) パレートは、本書を1907年から執筆を開始したが、病気によって中断を余儀なくされ、完成したのは1912年であった。しかし、第一次世界大戦の勃発によって出版は1916年まで遅れた。*Trattato di Sociologia Generale*, 3vols., Florence, 1916. *Traite de Sociologie Generale*, 2tomes., Paris, 1917. 日本語訳は、第12章と第13章の抄訳として、北川隆吉・廣田明・板倉達文訳『社会学大綱(現代社会学大系第6巻)』, 青木書店, 1987. Cf., S. E. Finer selected and introduced, *Vilfredo Pareto: Sociological Writings*, translated by Derick Mirfin, Pall Mall Press, 1966. p. 12.

4) ヘンダーソンがパレートの『一般社会学概論』に出会った時期については、見解が定まっていない。これまで1928年説と1926年説がある。1928年説に立っているのは、W. B. キャンオン、C. I. バーナード、C. E. ラセットである。1926年説に立っているのは、ヘイルとヘンダーソン研究者の第一人者であるJ. L. パラスキャンドラである。ヘンダーソンがパレートに関する最初の論文を書いたのは、後に示されるように、1927年であることから、1928年説に立つことは出来ない。他方、1926年説については、それを主張する明確な根拠が明らかにされていない。

わたくしは、1927年とする根拠を、ヘンダーソン自らがパレートに出会ったことを述べた資料に求めている。たとえば、彼がG. P. アダムスに宛てた1930年2月7日付書簡の中で、「過去2年間、わたくしはパレートの書物に非常に関心を抱いてきました」と述べ、その時期は、1928年2月頃ということになる。また、後で取り上げるヘンダーソンの論文“An Approximate Definition of Fact”に、「彼の書物を最初に研究した4年頃から」(p. 198)と記されている。この論文の発行は1932年であり、その4年前とは1928年となる。しかし、この論文を依頼したG. P. アダムスに宛てたヘンダーソンの1931年12月2日付書簡で、この論文の校正原稿を同封した旨を述べており、「4年頃前」というのは、1927年12月頃ということになるであろう。さらに、この後すぐに引用するL. E. アケレイに宛てた1937年9月14日付書簡の中では、「10年ほど前のある日の夕方」と述べている。「10年ほど前」とは1927年9月頃ということになる。

これらの資料からヘンダーソンがパレートの『一般社会学概論』に出会った時期を想定するならば、その時期は1927年9月頃から1928年2月頃の間ということになる。ヘンダーソン自身の記憶の曖昧さを考慮するとしても、わたくしはパラスキャンドラのように1926年説には立てず、1927年の秋(9月)頃から12月(パレートに関する最初の論文の発行)までの間と考える。Walter B. Cannon, “Lawrence Joseph Henderson 1878-1942,” *National Academy Biographical Memoirs*, Vol. XXIII, 1943. p. 42. Chester I. Barnard, “Introduction,” in *Introductory Lectures in Concrete Sociology*, by L. J. Henderson, unpublished typescript, edited by C. I. Barnard. p. 33. Cynthia E. Russett, *The Concept of Equilibrium in American Social Thought*, Yale University Press, 1966. p. 111. B. S. Heyl, *op. cit.*, p. 318. John L. Parascandola, *Lawrence J. Henderson and the Concept of Organized Systems*, unpublished dissertation, University of Wisconsin, Madison, 1968. p. 169.

5) Letter from L. J. Henderson to Lewis E. Akeley, Sep. 14 1937, Henderson Collection Folder 1-2, in Baker Library Archives, Harvard Business School. 同じような内容が、パレートのアメリカの唯一の弟子に向けた書簡でも示されている。Letter from L. J. Henderson to James H. Rogers, March 9, 1933, Henderson Collection Folder 15-12, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

社会学のフランス語版でした。私は表紙にある「社会学」という文字をみて、「いや、いらぬ。社会学はすべてくだらないし、二度と読まないことにしています」といったのです。それでも彼は、「これは、何かが違うんだ」といい、彼の勧めにまけてその書物を家に持ち帰り、それから二週間というものの間、ずっと最高の気分になり、時折大きな声で笑いながら読んだのです。

ヘンダーソンにパレートを紹介したウィーラーこと、ウィリアム・M・ウィーラー (William Morton Wheeler 1865-1937) は、著名な昆虫の社会行動研究者であったが、人間を含むあらゆる種の社会行動にも関心を持っていた。彼は社会学にも精通しており、「これは」と思った書物を誰彼なく薦めていたといわれる<sup>6)</sup>。

しかし、ヘンダーソンにとって、ウィーラーは1916年までまったく知らなかった人物であった<sup>7)</sup>。1916年という年は、哲学者のJ. ロイス (Josiah Royce 1855-1916) の主宰する「ニュー・クラブ (The New Club)」が、彼の死後、「ロイス・クラブ (The Royce Club)」と名称が変わった年である。ロイス・クラブは、科学方法、科学史、科学哲学、科学的な一般問題に関心を持っていた約20名ほどのハーバード大学の研究者からなるクラブであった。クラブは一年に3回くらいボストンで会合を持ち、夕食を取った後、ある人が読んだペーパーをもとに活発に議論を交わすものであった。ロイス・クラブは10年ほど続いたが、その間ヘンダーソンは幹事を務め、多くの研究者と議論を重ね、親密な交流を深めていたが、そのうちの一人がウィーラーであった。その後、疲労研究所 (the Fatigue Laboratory) を創設するにあたって、ヘンダーソンを委員長とする委員会の一員としてもウィーラーがいた。したがって、10年来の知己の関係にあったウィーラーがヘンダーソンの関心事を知っていたとしても不思議ではなく、パレートの『一般社会学概論』の紹介は、ごく自然の成り行きであったともいえよう。

「最高の気分になり」、読後感もさめやらないヘンダーソンは、その年の冬、わずか4頁という短いものであったが、「人間行動の科学：パレートおよび彼の偉大な業績の一つに対する評価」と題して、パレートの『一般社会学概論』の論評を行った<sup>8)</sup>。

彼は、その冒頭を次のような言葉から始めている。「ヴィルフред・パレートの『一般社会学概論』が世に出て10年が経っているが、これは、今世紀におけるもっとも重要な書物の一つである。この書物は知的満足を与える豊かな源泉であり、思想史上、新しい時代の到来となるかもしれない見事な科学構築物であるが、職業としている社会学者にしても、広く世間一般においても、アメリカではほとんど気にもとめられていなかった。とはいえ、人間社会に関心を持ち、それについて冷静に、論理的かつ科学

6) George Casper Homans, *Coming to My Senses: The Autobiography of a Sociologist*, Transaction Books, 1984. p. 104.

7) L. J. Henderson, "Memories," unpublished autographical manuscript dictated in period 1936-1939 in Widener Library Baker Library Archives, Harvard University. pp. 210-211. J. Parascandola, "L. J. Henderson and the Mutual Dependence of Variables: From Physical Chemistry to Pareto," *op. cit.*, p. 176.

8) "The Science of Human Conduct: An Estimate of Pareto and One of His Greatest Works," *The Independent*, Vol. 119, No. 4045, Dec. 10, 1927. pp. 575-577 and p. 584.

的に考えようとするすべての人に対して、この書物は安心して推奨されるであろう」と<sup>9)</sup>。

彼は、8年後の1935年にパレート社会学の研究成果である『パレートの一般社会学』を著すことになるが<sup>10)</sup>、それにしても、「アメリカではほとんど気にもとめられていなかった」パレート社会学に対して、しかも「社会学はくだらない」と思い込んでいたヘンダーソンは、どこに魅入られたのであろうか。

彼はいう、「おそらく本書は、これまでに著されたどんな書物とも異なるものである」と。すなわち、第一に、なによりも膨大な量であり、古代から近代に至る歴史、心理学、法学、習俗、政治学、犯罪学、そして途方もなく多彩に富む項目が例証として詰め込まれ、果てしなく詳細に、また繰り返し分析がなされており、このことはもっとも強力で持続性をもった論理的思考の手本である。第二に、主題となる素材が何度も現れるが、つねに興味ある変化がつけられており、有無をいわせぬ累積的效果を持っている。そして第三に、これまで科学的な取り扱いを受けることのなかった主題に対して、科学方法としての不可欠な要素がより明確に論述され、より徹底して展開され、このことは他の書物のどこにもみられないことである<sup>11)</sup>。

パレートが『一般社会学概論』で取り上げたのは、社会における人間の非論理的行動であり、その行動を通じての社会動態の問題である。ヘンダーソンの関心は、その具体的な人間行動とそれに対する科学分析の方法であり、社会動態の分析理論の中核をなす二つの概念、「残基 (residue)」と「派生体 (derivation)」を取り上げる。それは人間の非論理的行動解明への基礎概念である。

ヘンダーソンは、これらの概念に言及する前に、最初の500頁の序文に注目し、そこには読者に納得してもらいたい二重の狙いがあるとする<sup>12)</sup>。第一に、通常の人間の行動は、客観的実在に対応する、という科学理論や事実の正確な知識によっては導かれず、一定の感情、本能、欲望によって導かれ、その行動に対する論理的説明の外見を装った文字合わせ (logomachies) を伴った非論理的行動である、ということである。第二に、この途方もなく長い序文によって、諸現象にみられる非論理的行動の斉一性 (uniformities) を繰り返し読者に指摘することを通して、後に展開されるさまざまな定義のもつ重大な不都合さを避けようとしていることである。

われわれは、往々にして、パレート社会学における人間行動を分析する中核概念である「残基」と「派生体」に注目してしまう。しかしヘンダーソンは、まず、分析される経験の世界が示され、そこにみられる斉一性が明らかにされている500頁に何よりも着目しているのである。経験の世界の斉一性を明らかにするために、経験についての記述が試みられる。しかる後に、それら発見された斉一性を分析するために概念の構築が行われる。認識よりも経験が科学の出発点なのである。ヘンダーソンによる、パレートの研究対象である経験の世界を描き出している序文への注目とそれらの狙いの指摘は、パレー

9) *Ibid.*, p.575. パレートの『一般社会学概論』を英語圏で初めて正面から取り上げたのは、ソロキンであるといわれる。

10) *Pareto's General Sociology: A Physiologist's Interpretation*, Harvard University Press, 1935. 組織行動研究会訳『組織行動論の基礎—パレートの一般社会学—』、東洋書店、1975年。

11) L. J. Henderson, *op. cit.*, pp. 575-576.

12) *Ibid.*, p. 576.

トが科学の手続きを正しく踏んでいることを強調しているのである<sup>13)</sup>。

次に、残基と派生体の概念を用いた人間行動の斉一性の分析について、ヘンダーソンは社会現象の斉一性への単なる近似的な記述に過ぎないと考え、この近似的な特徴を欠点としてではなく、むしろ長所として評価する。なぜならば、パレートは、科学の普遍的な方法に従って、今後のより一層正確な近似への道筋を示しているからである。われわれが考えなければならないのは、概念そのものではなく、「事実への近似的定義」として、社会における人間行動の分析的かつ総合的な取り扱いにおいて、その概念を用いて、何が、どこまで解明できるか、というテストなのである。

500頁の序文に盛り込まれている原始から近代に至る人間社会には、ある一定の感情がほとんど変化せずであり続け、人々の行動に普遍的に表れている。これら人間行動にみられる不変的な感情の表出が「残基」と呼ばれるものである。感情に基づく行動は、部分的には客観的な実在から生ずるものの、その実在に対応していないのが日常である。そして「派生体」とは、これら残基がもたらす非論理的な説明あるいは正当化を意味し、時代や場所によって変わり、さまざまな形となって示される。それゆえ、多種多様な説明や理論の根底には変わることもない一定の感情があり、非論理的な理論に大きな違いはあるが、「...あらゆる思慮深い人は、ボルシェビキ、ファシスト、そして100%のアメリカ人の間には共通の感情が存在していることに気づいているに違いない」のである<sup>14)</sup>。

残基と派生体によって説明される非論理的行動について、ヘンダーソンは、「...社会にとって価値があるかもしれないし、そうでないかもしれない...概して非論理的行動は、社会過程の非常に大きな部分を作り上げ、その存在にとってまさに不可欠なものである」<sup>15)</sup>。そして、「こうした事実(変わらぬ感情と多様な説明があることについての事実)について考えることは、非論理的行動が必ず事実と一致しない、あるいはそれらが社会にとって決まって有害である、という非論理的な結論から免れるために、もっとも意義深いことである」とする<sup>16)</sup>。

さらに、ヘンダーソンは社会動態を分析する社会均衡の問題に言及する。残基と派生体は、社会均衡の他の要因とともに相互依存の状態にある。パレートが数多くあるなかで選択した他の要因とは、「経済的利害」と「社会的異質性」である。彼はこれら四つの要因ないし変数の相互依存性の分析に考察を進めるわけであるが、そのためには数学が不可欠である。しかし数量化を許さないゆえに、記述の方法をとるが、ヘンダーソンは、「この困難な主題を議論するために多くの紙数を使い、あたかも彼は問題の近似的数学解決をもっているかのように、数学的証明を理解できない読者のために彼の分析の説明を行っている。結果は満足のいかないものであるが、他と比較するならば、社会のまさに動態的な構想が最後には現れている」とし、「その記述は、必然的に粗い近似である。しかしそれは、非常に貴重な始まりでもあるように思われる。偶然ではあるが、この好奇心をそそる社会学的問題の論議は、おそらく

13) ホーマンズによると、「科学哲学の健全な論述であると考えたヘンダーソンは、とくに第1章に心を惹きつけられていた」という。G. C. Homans, *op. cit.*, p. 104.

14) L. J. Henderson, *op. cit.*, p. 576.

15) 彼は、社会の存在に不可欠な残基および派生体の分類に言及し、とくに派生体の分類に基づく分析は、パレートの「名人芸」ともいえる能力がいかに発揮されているとする。*Ibid.*, p. 577.

16) *Ibid.*, pp. 576-577. 括弧内は、引用者による。

生物科学一般の現存するもっとも優れている論理的局面の扱いの基礎になるものである」と、その洞察力を高く評価している<sup>17)</sup>。

しかしヘンダーソンは、この小論の最後に、パレート社会学の限界をニュートン (Sir Isaac Newton 1642-1727) の『プリンキピア』(Principia)<sup>18)</sup>と比較するような形で指摘している<sup>19)</sup>。

まず、パレートの著作は、「非論理的行動」の是非の判断がきわめて困難であることから、多分に事実に関する多くの誤りを含んでいる。他方、ニュートンの著作はこのような誤りを免れている。次に、パレートの残基、派生体、利害、社会的異質性という変数の選択は、変更を余儀なくされ、将来まったく取って代わるかもしれないし、付け加えることは避けられない。ニュートンの変数の選択は、実際には何の修正も必要としない。さらに、パレートの著作はほとんどまったく定量的研究ではなく、たとえ定性的であったとしてもきわめて粗い接近である。ニュートンは完全であり、正確でないにしても定量的でかなり定性的でもある。そしてパレートの著作は明らかに論理的に一貫しておらず計画性がない。ニュートンは統一され、完璧である。

「それにもかかわらず」とヘンダーソンは続ける。パレートをニュートンと比較すること自体一つの評価を示しているが、「パレートは、ニュートンと同じように、紛れもない一つの体系を構築したのであり、賢明な読者は、最終的に事実について考えることができる自分に気がつく。パレートの課題の複雑さを考慮に入れるならば、彼の業績が偉大であり続けることを疑うことが出来るものはほとんど誰もいない」。さらに「パレートは、情熱や感情を、さらにこれらが人間行動を支配する方法を解明するために研究し、探し求め、そして彼は、他の人びとの夢をはるかに超えるような大成功を納めたのである」と結んでいる<sup>20)</sup>。

パレート社会学の紹介を兼ねたこのヘンダーソンの小論には、彼の感情の表現が所々みられることは否定できず、かつ彼の記述は非論理的な記述であるといえなくもない。しかし、「社会学はくだらない」と思い込んでいたヘンダーソンがウィーラーによって「パレート社会学に出会い、その感激を記したものである」と解釈すれば、その時のヘンダーソンの心の状態を理解できるであろう。彼は、パレートの『一般社会学概論』に示されている科学の手続きおよび方法に裏付けられた人間行動の分析とそれに基づく社会動態の問題に注目し、感情に満ちた人間行動の科学研究の可能性を認め、その期待を表明したものであるといえよう。

B. バーバーが指摘しているように、パレートの『一般社会学概論』は、まさにヘンダーソンが探し求めていたものであった。彼はパレートの熱狂者となり、1927年を境として彼が亡くなる1942年までの15年間、“Paretian Career”の旅を歩むのであった<sup>21)</sup>。

17) *Ibid.*, p. 577.

18) *Philosophie Naturalis Principia Mathematica*, London, 1687.

19) *Ibid.*, p. 577 and p. 584.

20) *Ibid.*, p. 584.

21) Bernard Barber, "Introduction," in *L. J. Henderson on the Social System: Selected Writings*, edited by Bernard Barber, The University of Chicago Press, 1970. p. 5.

### 第3節 パレート社会学啓蒙への一步

ヘンダーソンの「パレート社会学」の評論を読んだボストン近郊のウースターにあるクラーク大学出版部から、早速、「翻訳をなさる希望を強くお持ちならば、喜んでお引き受けしたい」旨の手紙が舞い込んだ<sup>22)</sup>。「社会学のみならず、生物学のような他の諸科学にとってももっとも優れた論述」であり、「公刊された著作のなかで今世紀のもっとも重要なもの」<sup>23)</sup>とするパレートの『一般社会学概論』は、「遅かれ早かれ、英訳が必要となることはほとんど疑わない」<sup>24)</sup>ヘンダーソンにとって、願ってもない申し出であった。彼は、すぐさま「いつでも喜んで会いましょう」と答えた<sup>25)</sup>。

そうはいうものの、ヘンダーソンは、フランス語版にして1800頁余りの大書を翻訳することが出版社にとっていかに負担になるかを懸念していた。しかしそれだけではない。彼は、パレート社会学の啓蒙には大変な困難が伴うものであると自覚していた。彼は、友人に宛てた書簡の中で、「概してアメリカの社会学者たちは感情的なので、この研究成果を理解せず、それゆえに出版に反対するでしょう。また、パレートが人間の非論理的行動を説明をするにあたって独自に工夫した特異性のゆえに、一般読者を近づき難くさせています。さらには、自らの感情や情緒を冷静に見つめようとはしないほとんどすべての人の気持ちを損ね、このことが若者を惹きつけることをしない、という重大な不利益となっています」と述べている<sup>26)</sup>。

しかし、彼は続けていう、「社会学を判断することについてわたくしの限られた資格からすれば、わたくしは、有機体の特徴を有したシステムにおける多くの変数をもつ相互依存性についてのパレートの議論に限定しています。科学の歴史は、これが科学の偉大な問題の一つであることを示し、わたくしは過去8年間、生理学の分野でこの問題に関心を持ってきました。わたくしは、この問題の生理学的な特殊な側面と同様に、一般的側面にもきわめて深く精通しており、わたくしが考え抜いた見解では、その主題に対する興味をそそられ、価値あるパレートのような取り扱いは他に類をみない、ということであり、このことは公言してはばかりません」と<sup>27)</sup>。

この指摘は、先の評論では必ずしも明確に触れられていなかったことである。異なる諸現象に対する共通した一般的概念枠組に関心を持っていた彼は、時空を超えたあらゆる人間行動を解明するために、

22) Letter from Carl Murchison to L. J. Henderson, Dec. 12, 1927, Henderson Collection Folder 9-2, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

23) Letter from L. J. Henderson to John Maclean, Oct. 10, 1928, Henderson Collection Folder 9-1, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

24) Letter from L. J. Henderson to Alfred A. Knopf, Jan. 19, 1928, Henderson Collection Folder 7-14, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

25) Letter from L. J. Henderson to Carl Murchison, Dec. 14, 1928, Henderson Collection Folder 9-2, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

26) Letter from L. J. Henderson to Alfred A. Knopf, Jan. 19, 1928, Henderson Collection Folder 7-14, in Baker Library Archives, Harvard Business School. T. パーソンズは、ヘンダーソンについて、「ヘンダーソンを知る人たちは、彼が政治上の事柄ではまぎれもなく保守的であること、さまざまな知的事柄ではごく少数を除いて社会学者に対する——わたくしはそう判断するのだが——偏った批判が例証されること、これら両面において独断的でおそれられていた人物であったということを想い起こすであろう」と記している。Talcott Parsons, *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, The Free Press, 1977. p. 30. 田野崎昭夫訳『社会体系と行為理論の展開』, 誠信書房, 1992年. 36頁.

27) Letter from L. J. Henderson to Alfred A. Knopf, Jan. 19, 1928, Henderson Collection Folder 7-14, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

その中核にシステム、つまり諸要素の相互依存性を据えた一般理論の構築に向かうことになる。

かくして、ヘンダーソンは、「一般社会学におけるパレートの方法と成果をさらにはっきりさせることは、大きな仕事でしょうし、それは私の能力を超えるものと思いますが、その方向に向けて何かがなされるべきであることにまったく同意します。そう遅くならないうちに、間違いなく何かがなされるでしょう」と吐露している<sup>28)</sup>。折りしも、ヘンダーソンは1928年に、その前年に行ったイエール大学のシリマン講座 (Siliman Lectures) を基にした血液の物理化学システムの研究成果を公にした後<sup>29)</sup>、一転して“Paretian career”の道を歩み始めるのである。

パレートに出会った約2年後の1930年1月、ヘンダーソンのもとへ、カリフォルニア大学哲学部のG. P. アダムス (George Plimptom. Adams 1882-?) から「ミルズ講座 (the Mills Lectureship in Philosophy)」の依頼が届いた<sup>30)</sup>。ミルズ講座は、カリフォルニア大学で古くから開かれている半年もしくは年間の講座であり、毎年アメリカおよびイギリスの著名な哲学者によって行われ、学部と大学院の二つのコースに分かれていた。

シリマン講座以降、パレート社会学に傾倒していた彼にとって、願ってもない、まさに好機到来であった。

彼はその依頼を快諾し、次のような講座内容を示した<sup>31)</sup>。まず学部においては、科学哲学に関して「主に歴史的観点からみた科学の方法および哲学の論議」と題する週3回の講義を行うこととした。あらかじめ学生が読むべきものとして、彼は、ウィリアム・ハーヴィ (William Harvey 1578-1657) の *The Motion of the Heart and Blood in Animals*、ガリレオ・ガリレイ (Galileo Galilei 1564-1642) の *Dialogues on Two New Sciences*、そしてクロード・ベルナル (Claude Bernard 1813-1878) の *Introduction to the Study of Experimental Medicine* の三冊の書物を挙げている。

そして大学院において、ヘンダーソンは自らの関心をまともなぶつけようとした。「過去2年間、私はパレートの書物に非常な関心を抱いてきました。そして多くの思索を重ねました。この研究のもっとも興味ある側面の一つは、科学方法の論議であり、私の知る限り、これまで公刊されたものの中でもっとも懐疑的で、もっとも徹底した経験的な取り扱いをしているものです」。彼は、大学院生に対して、『

---

28) Letter from L. J. Henderson to Henry O. Taylor, Jan. 14, 1928, Henderson Collection Folder 17-3, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

29) *Blood: A Study in General Physiology*, Yale University Press, 1928. ヘンダーソンは、血液研究への本書の主要な貢献の一つとして、変数の相互依存性の概念の強調とそれらの相互関係を表すノモグラムの採用にある、と考えていた。R. ピアーによると、この書物は、生物学での哲学的論述、その方法論、そして多くの生物学的観察の総合、という三つの点で重要な書物であるとされており、今日でも血液に関する古典となっている。Cf., J. L. Parascandola, *op. cit.*, pp. 122-123. また、シリマン講座を行った同じ年に、彼は、近代生理学の始祖であるクロード・ベルナルの著書の英訳版に序文を寄せ、生気現象の調和的統一性における主張と内部環境の恒常性についての仮説を高く評価した。Claude Bernard, *Introduction à l'étude de la médecine expérimentale*, 1865. Trans. Eng. by Henry C. Green, with Introduction by L. J. Henderson, *An Introduction to the Study of Experimental Medicine*, Macmillan Company, 1927. 三浦岱栄訳『実験医学序説』、岩波書店、1938年、1970年(第5版改訳)。

30) Letter from George P. Adams to L. J. Henderson, Jan. 20, 1930, Henderson Collection Folder 1-1, in Baker Library Archives, Harvard Business School. アダムスがヘンダーソンに依頼をした理由は、彼が「科学の哲学的側面に関心を持ち、貢献をしているこそして彼が若いときに、ロイス教授の哲学セミナーに出席していたことがある」としている。

31) Letter from L. J. Henderson to G. P. Adams, Feb. 7, 1930, Henderson Collection Folder 1-1, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

『一般社会学概論』のフランス語版ないしイタリア語版を週に150頁、25,000語の割合で通読することとし、主題に対する取り扱いの基礎にある方法の問題を議論しようとするものであった。彼は、「哲学を専攻するほとんどの学生は、その著者の見解の多くことに怒りを覚えるであろうことは疑いをもっておりませんが、その研究がそれを真剣に取り組もうとしているどのような人にもきわめて価値あるものであると確信を持っています」と述べており、ヘンダーソンのパレート社会学啓蒙への意気込みが充分に感じとられるものであった。

こうして、ヘンダーソンの初めてのパレート社会学講義は、1931年1月13日から4月24日までに行われることになった。

しかし、彼のミルズ講座は、病気入院のために中断のやむなきに至った<sup>32)</sup>。

#### 第4節 科学方法における事実と感情

カリフォルニア大学のミルズ講座の中断は、ヘンダーソンにとってたとえ病気のためとはいえ、非常に不本意なものであったに違いない。けれども、たまたま彼は、ミルズ講座を引き受けるのと平行して、アダムスから論文の依頼を受けていた<sup>33)</sup>。カリフォルニア大学哲学研究会が毎年特定のテーマに基づいて雑誌を編集しており、ヘンダーソンへの依頼、つまりその年のテーマは、「事実」ないし「事実の問題」であった。彼は、「事実への近似的定義」と題して寄稿した<sup>34)</sup>。わたくしは、この「事実への近似的定義」を、パレート社会学を基礎としつつも、一般社会学の成立可能性を求め、その一歩として科学方法の基礎を提示したものと位置づけることができる。

ヘンダーソンは、この論文において、「事実」といわれるものに対して科学はどこまで応えられるか、という問いに対して、その表題が示すように、人間は、事実に対して「近似的定義」しかできない、ということを目指し、なぜ「近似」なのかを明らかにしようとした。

まず、「事実」そのものが問題となるが、ヘンダーソンは「事実とは、何か」という問題に対して慎重を期して明確にすることを避け、むしろ事実を「言葉が有している便利で、近似的な規定」として扱っている<sup>35)</sup>。

彼は、事実という言葉よりも、斉一性という言葉を用い、「...わたくしは、わたくしの経験におけるある一定の斉一性を記述しようとしている。わたくしがないうるほとんどのことは、若干の斉一性に

32) Letter from L. J. Henderson to G. P. Adams, Dec. 9, 1931, Henderson Collection Folder 1-1, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

33) Letter from G. P. Adams to L. J. Henderson, Dec. 4, 1930, Henderson Collection Folder 1-1, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

34) "An Approximate Definition of Fact," *University of California Publication in Philosophy*, No. 14, 1932. pp. 179-200.

35) *Ibid.*, p. 179. ここにいう「便利さ」とは、「記憶を助ける」という意味で用いられている。なお、ヘンダーソンは、この論文の草稿において、「事実」について次のように説明している。「... 便利な規定が何もないと仮定するならば、次のような手続きを進めて行くであろう。第一に、事実と称される事物とそれに類する事物を集めよ。第二に、集められた事物の特性を分析せよ。第三に、斉一性を記せ。第四に、諸特性にみられる斉一性を基礎に事物を分析せよ。第五に、分類にしたがって、さらなる斉一性を求めよ。第六に、観察される斉一性の観点から、便利であると思われる『事実』という言葉の定義を選べ。第七に、なお一層広い観察と分析によって定義をテストし、その観点から一般的に記述せよ」。L. J. Henderson, "Fact," unpublished papers, Henderson Collection Folder 19-21, in Baker Library Archives, Harvard Business School. この草稿には、バーナードと思われる筆致で「1932年3月以前」と記されてある。

ついでに非常に粗い記述を求めることであり、その記述はいくらよくみても正確さにほど遠く、考えられる多くの記述の一つにしか過ぎないものであることを、経験からの帰納によってわたしは確信している」とする。言い換えれば、その記述は、「わたくしの経験のある部分が含まれ、利用できる数多くの考えられる概念枠組の中の一つ」なのである<sup>36)</sup>。そして彼は、「...わたしの言明は、精密ではなく近似であること、確かではなく、もっともらしいものとして考えるべきである...経験の言明について唯一確かなことは、それらが確かではなく、また正確でもないことである。」と強調する<sup>37)</sup>。

ヘンダーソンの主張、つまり、自分が用いる概念枠組が、多くの考えられる枠組の一つに過ぎず、経験の言明は正確ではなく、近似である、とするのはなぜだろうか。ヘンダーソンは、その理由をまず経験に求める。

われわれは、自らの経験を描き出し、その斉一性を探し、そして一般に事実といわれるものを求める。経験を離れて事実はあり得ないから、すべては経験に始まる。ヘンダーソンは、経験を「有機的過程」と捉え、「部分の総計ではない」とする。彼は経験について厳密な定義をせずに、便宜上、「見るという感覚器官による経験、渇きを覚えるという末梢神経による経験、恐れるという“inceptor”による経験、ゲシュタルトを認識することや夢を見るという他の原初的な心の経験、言葉で感情を表現する非論理的な心の作用、計算したり言明を定式化するという論理的な心の作用、頭を動かしたり測ったりするという肉体的な作用」などから構成されているとする。ここでヘンダーソンは、経験をつくっている要素のすべてを示すことを狙いとしているのではなく、経験を構成している諸要素の関係を強調し、「経験という過程は、無限に数多くの非常に異質な変数の相互依存性を含むものとして考えられるものである」とする<sup>38)</sup>。科学の出発点である経験は、諸要素が分かち難く結び合った「有機的過程」として捉えられる。

有機的過程としてつかまえられる現象においては、一般に因果分析は誤った結論に導き、唯一の方法は相互依存分析しかない。ヘンダーソンは、対象をいくつかの構成要素に分けたとしても、それは恣意的なものであり、それが恣意的であるということをつねに心に留めておかなければ、しばしば人を誤らせることになることと戒めている。それゆえ、経験から概念枠組が構築され、構築された概念枠組が経験を構成している相互依存関係にある諸要素をあますところなく反映していない限り、その概念枠組を通じての記述は、数多くの中の「一つにしか過ぎない記述」ということになる。それゆえにまた、「経験の言明について唯一確かなことは、それらが確かではなく、また正確でもないことである」。ここに、事実への近似的定義の一つの根拠がある。

次に、経験を通じてつかみ取ったものは、言語によって記述される。たとえば、経験は、「わたしは、奥入瀬をみている」のであり、その「経験の言明」は、「私は、奥入瀬をみた」となる。そして、「結論

---

36) L. J. Henderson, "An Approximate Definition of Fact," *op. cit.*, p. 179.

37) *Ibid.*, p. 180.

38) *Ibid.*, pp. 183-184.

の言明」は事実として、次のように記述される<sup>39)</sup>。

$$A \text{ Fact} = nF_s + (1-n)F_c \quad \text{ただし } 1 \geq n \geq 0$$

ヘンダーソンによると、「結論の言明」である事実は、 $F_s$ の科学事実、 $F_c$ の共通事実からなる。科学事実は、「経験の陳述から論理操作によって引き出された、曖昧でない用語による言明であり、陳述される経験が、観察者に関して、そして観察と実験に関して、十分に数多く、十分に多様であるような場合」である。共通事実は、たとえば、「これが、奥人瀬だ」というように、「ゲシュタルトが含まれる刺激に対する反応とほとんど等しい、確証された言明」である。

彼が問題とするのは、科学事実である。科学事実を示すために、「経験の言明」から「結論の言明」として、ある事実を記述するために操作を行う。ヘンダーソンは、経験から事実に導く操作の方法を二つに分ける。すなわち、「論理操作」と「非論理操作」である。論理操作による結論の言明は、事実と証明されない論理的結論に分けられ、科学事実の問題である。他方、非論理操作による結論の言明は、「奥人瀬は美しい」という事物への感情に基づく言明、「真実は美しい」という感情に伴う感情の言明、感情そのものを表現する言明、さらに「存在は真である、絶対である」の言明、などがある<sup>40)</sup>。

感情は、人や階層により、また世代や人種によって、さらに場所によってさまざまであり、感情に関連した行動の斉一性を期待することはできない。たとえば、「美しい」の規定を厳密に行い、その規定に基づいた「美しい」の特性とある行動の特性との検証をすることはできる。しかし、人は、自分が持っている感情に従って話をしたり、他の人の感情に反応して行動しているのを習性としている。「かように、何がばかばかしい(美しい)かを仮定するために、感情との一致ということを考えずにあらゆる言葉を使って定義されたとしても...感情を表現したり感情に基づいて行動するためには、言葉がそれらの定義とは別個に用いられるのは確かなことである」<sup>41)</sup>。

こうして、「美しい行動」の恣意的な定義も機能しないし、他の人の感情の表出を観察し、それに基づいた定義も何も機能しないことになる。したがって、「美しい」として同意が得られるような、論理的な、観察ないし実験による操作による定義はなく、たとえ「美しい」の定義を行ったとしても、結果として、それは「意味のない」ものとなる。

また、感情そのものではなく言葉を伴った感情の表現についても、より一層多彩であり複雑である。ヘンダーソンによれば、「それは、われわれのすべての経験においてもっとも定まらないものであろう」し、「感情の表現の観察は、多くの他の変数を同時に広く観察することに結び付けられなければ、斉一性の発見をもたらさない」のである<sup>42)</sup>。

さらに、「存在は真である」あるいは「本当に存在する」という言明もまた、感情という非論理的操作に基づくものとされる。その感情は、「ほとんど変わらず、きわめてわずかしら修正されず、すべての感情のうちでもっとも変数の少ないもの」であるから、そうした感情の表現の観察から斉一性は発見できる。しかし、ヘンダーソンは、「絶対存在」や「真の存在」の証明のために、あらゆる人に共通し

39) *Ibid.*, p. 180.

40) *Ibid.*, p. 184.

41) *Ibid.*, p. 193. 括弧内は、引用者による。

42) *Ibid.*, p. 193.

た願望を満たすような定義は一つもないとする<sup>43)</sup>。

したがって、非論理的操作に基づく結論の言明は、論理的操作による結論の言明とは基本的に異なり、「明らかに科学事実ではない。共通の事実でもない... こうした言明は、事実でもないし、誤りでもない」。「それは、非事実である」<sup>44)</sup>。

このように、ヘンダーソンは、「事実への近似的定義」の論文において、科学思考のもつ誤りの源泉について論じた。その源とは、第一に、動物や社会が持っている、そして経験が有する有機的特徴であり<sup>45)</sup>、第二に、事実ないし論理的推理と感情ないし感情の表現との間を峻別できないことである。

彼は、経験を構成している諸要素の相互依存性という問題に直面するとき、どの部分の分析もいかに困難であるかを明らかにし、それにもかかわらず、近似的な論理操作によって到達した結論と、感情の表現が便宜上無視できない結論とを識別することが可能であることを示そうとした。したがって、科学は、近似的であるということ、そして事実と非論理的な操作による言明（たとえば、「義務は、神の声である」、「親は子供を愛し、養育すべきである」、「外的な世界が本当に存在する」、「これは大きな部屋である」、「これは美しい行動である」、などの言明）との峻別の上においてのみ成立するものとなる。

こうした見解は、ヘンダーソンにとって、長年にわたる自らの研究からつかみ得た結論であったとされる。しかし、彼は、「パレートの広範囲にわたる現象に対する力強い包括な分析によって、以前は曖昧であったが、明確となった」とし、「パレートの著作のどこに負っているかを特定化することは困難である。おそらく、この論文のほとんどは、その内容において、とくに方法において、ある程度までパレートに帰するものである」と告白している<sup>46)</sup>。

ヘンダーソンは、パレートの『一般社会学概論』との邂逅によって、科学の方法を社会現象に適用できると確信した。そしてその際もっとも重要となるのは、研究対象もさることながら、研究する側の問題として、研究者という人間の根底にある感情の取り扱いである。「わたくしはいつも科学の方法に関心を持っており、それに付随して科学者の行動に対する方法論の関係にも関心を持ってきた」<sup>47)</sup> ことの証左を、この論文にみることができる。

「事実への近似的定義」は、ヘンダーソンにとって人間行動の科学研究への一歩を記すことになるのである。

43) *Ibid.*, p. 195.

44) *Ibid.*, p. 196. ヘンダーソンは、1935年に著した『パレートの一般社会学』において、次のように述べている。「...感情は事実とはみなされない。人間の行動と表現が事実なのである。ある場合には、このような行動と表現が便宜的に、感情の表出とみなされる。感情は、現実とも非現実ともみなされない。この点に関しては、近代力学において諸力が考察されるように、感情が考察されるのである。したがって、想定された感情の存在は、経験によって証明もされないし、反証もされない。しかし... 仮説の助けを借りて、諸事実の中の斉一性が発見されるのである」と。L. J. Henderson, *Pareto's General Sociology: A Physiologist's Interpretation*, Harvard University Press, 1935. 組織行動研究会訳『組織行動論の基礎—パレートの一般社会学—』, 東洋書店, 1975年. 16頁.

45) ヘンダーソンは、この有機的特徴に関して、A. N. ホワイトヘッドの基礎概念である“prehension”「把握」に注目している。*Ibid.*, p. 198. Cf., Alfred N. Whitehead, *Science and the Modern World*, The Free Press, 1925. p. 69. なお、この書物に対して、ヘンダーソンは書評を行っている。L. J. Henderson, “Review of A. N. Whitehead's *Science and the Modern World*,” *Quarterly Review of Biology*, No. 1, 1926. pp. 289-294.

46) L. J. Henderson, “An Approximate Definition of Fact,” *op. cit.*, p. 198.

47) Letter from Henderson to Colonel A. Woods, Oct. 31, 1932, Henderson Collection Folder 17-12, in Baker Library Archives, Harvard Business School.

## 第5節 人間行動への科学的接近

1932年11月、ヘンダーソンは、ハーバード・ビジネス・スクールで開講されている「ビジネス・ポリシー講座」において、「科学、論理、そして人間の交わり」と題する講演を行った<sup>48)</sup>。彼はこの講演において、科学研究の対象を人間行動、とくに日常会話という人と人の交わりを取り上げ、人間の相互作用の問題に対する科学的接近の可能性についてさらに踏み込んだのである。

われわれは、日常の会話において、事実の問題を取り上げたとしても、その論理的な分析まで関心を持たないのが普通であろう。たとえ話を論理的に進めるとしても、話題は非常に限定されたものとなり、それがうまく行くかどうかは、当事者の能力と聡明さにかかっているといえよう。さらに話題が具体的な問題から一般的、抽象的な問題になった場合には、会話を続けていくにはさまざまな困難が伴う。

そうした能力を持つこと、あるいは会話を続けていくためには、どのようにすればいいのか。ヘンダーソンは、二つの条件が必要であるとする<sup>49)</sup>。第一に、ある問題について話をする場合、概念枠組、ある物事を他に関連づける方法、作業仮説、事実を操作する準拠枠などが必要である。第二に、自分の思考を明確に押し進めていくために、概念枠組だけではなく、思考のための十分な方法が必要である。

当時のアメリカにおいても、会話を通じて行われる販売や広告についてさまざまな枠組や方法が開発されているが、ヘンダーソンにとってははなはだ不十分であった<sup>50)</sup>。そこで彼は、「ビジネスや法律、さらには医学の実践において、高度に発達している科学から作業仮説と方法の双方を見つけ出すことである」として、自ら長年にわたって研究をしてきた生理学、生化学の立場から、日常会話を科学として扱う問題に言及していく。

「科学は、事実から始まる」として、ヘンダーソンは事実を規定する。すなわち、「自然科学の経験から判断して、事実とは、見る、聞く、触る、味わう、嗅ぐことによる事物についての明確な言明として、もっとも便利に規定される。すなわち、それらは、外部の対象ないし現象を観察している人びとによってなされるような観察データについての言明である」と規定するが、このように規定される事実は、前節の「事実への近似的定義」で指摘したように、経験の世界での具体的な事物そのものとは異なる種類であると注意している<sup>51)</sup>。

そして科学は、思考の手段として概念枠組ないし理論を用いる。概念枠組を用いるのは、それを用いることが便利であるからであり、概念枠組を通して事実が発見され、既知の事実から未知への事実に進む筋道となり、事実のみならず事実についての推理を支える機能をも有している。さらに科学は、発展するにつれ、それまで支配的であった見解を古いものとして捨てることになるが、それは新しい事実の発見をもたらす概念枠組の変更によるものである。それゆえ、科学が発展するか否かは、思考の手段としてどのような概念枠組をどのようにして用いるかにかかっていることになる。

48) "Science, Logic, and Human Intercourse" この講演は、以下に収録されている。Harvard Business Review, Vol. XII, No. 3, April 1933. pp. 317-327.

49) Ibid., p. 317.

50) 確かに、ヘンダーソンが取り上げようとしている人間の相互作用の問題は、ホーソン・リサーチの研究成果を待たなければならなかった。これまでほとんど触れられることがなかったが、ホーソン・リサーチにはヘンダーソンが深くかかわっており、このことは別の機会に明らかにするつもりである。

51) Ibid., pp. 317-318.

次に、科学の思考方法として、推理が用いられる。ヘンダーソンは、その推理の過程には二つの誤りが生ずる恐れがあるとする<sup>52)</sup>。

第一に、多くの要因が関連し合う状況に対して因果性を用いることから生ずる。政治、経済、経営と呼ぶ複雑な状況に対して推理を用いるとき、因果分析は誤りをもたらす。それに代わる方法は相互依存分析であるが、そのようなときに、「他の条件が等しい」という限定をつける。しかし「他の条件が等しい」として推理を行ったとしても、「他の条件が等しい」状況を特定化しなければ、その推理は意味のないものとなり、たとえその条件を特定化したとしても、当然のことながら、「他の条件が等しい」現実などありえない。

ヘンダーソンは、こうした問題から生ずる推理の誤りを防ぐために、『「他の条件が等しい」』ことの推理が、しばしば複雑な状況を研究する唯一の手段であること、そして思慮深い人は、他の条件への親密な経験的知識を有しているとするならば、しばしば論理的な落とし穴を避け、有用な結論に到達することを理解すべきである」と述べている<sup>53)</sup>。

推理過程の第二の誤りは、直接に、あるいは言葉の曖昧さを通じて侵入してくる感情から生ずる。この誤りは古くから認識され、ヘンダーソンは、F. ベーコン (Francis Bacon 1561-1626) の『ノヴム・オルガノン』における「イドラ」がその理解に役立つとし、さらに推理の誤りの源泉として「単純な主張からの感化」、「権威への訴求」、「感情との一致」、「言葉による証明」というパレートの四つの「派生体」を取り上げている。彼は「疲労」の定義上の問題を例に挙げ、「用心深くしなければ、疲労という言葉が曖昧なやり方で使うことになり、根拠が薄弱のまま推理をしていることに気づくことになる」と指摘している<sup>54)</sup>。

論理的推理は、パレートの「派生体」に対応させて述べれば、主張に基づく推理ではなく、証明された事実に基づく推理である。また論理的推理は、権威への訴求ではなく、事実が注意深く、周到にして巧みに得られた上での確からしさに訴えるものである。さらにそれは、言葉によるまやかしを排除して成り立つものである。

では、感情が侵入した非論理的推理を排除し、論理的推理に基づいて会話状況をどのように取り扱ったらいいのか。

問題は、会話する当事者たちの間には感情が一致することがほとんどあり得ないことである。使われている言葉の解釈の相違そのものを問題としても、そこからは何も生まれてこない。感情を表現するこれら曖昧な言葉に関して、曖昧さからくる問題を避け、話し相手の行為を通じて目的を達成しようと望むならば、議論をせず、「あなたがたは、彼らにやってもらいたいことを行うように彼らの行為を変えようとするならば、彼らの感情を通じた行為によって行うべきである」ということになる<sup>55)</sup>。ヘン

52) *Ibid.*, p. 322. この推理過程の二つの誤りについては、前節の「事実への近似的定義」で述べたものと基本的に同じであるが、この論文ではもう少し具体化への努力がなされており、この点を意識しつつ取り上げた。

53) *Ibid.*, p. 322. ヘンダーソンが強調している箇所は、彼が最終的に到達する科学方法の第一段階である「事物への直観的習熟」へと結びついていくものである。Cf., L. J. Henderson, "The Study of Man," *Science*, No. 94, 1941. pp. 1-10.

54) *Ibid.*, pp. 322-323.

55) *Ibid.*, p. 325.

ダーソンは、そうした行為を行うことができるのは、「鋭い感覚、洗練された物腰、育ちの良さ、また思いやり」をもった人であるとする。彼らの行為は無意識で行われることもあるが、それが意識的に行われるとしたら、それは他の人びとの感情の重要な部分に対して正しい診断を行い、彼らの感情を目標の中に巧みに取り入れることである。

そのためには、状況の明確な分析、科学的な解明が不可欠であり、人びとの会話中に起こっていることをつかみ得るような概念枠組を必要とする。起こっていることが論理的な性質ではないだけに、必要とする概念枠組は、会話の大部分が人間の感情と利害の相互作用であるという仮説を含んでいなければならない。ヘンダーソンによると、若干の最高経営者や卓越した政治家は、そうした仮説を含んだ思考方法の有用性に気づいているが、西ヨーロッパに比べてアメリカ人はこのことを学びとっていない。「そこで、わたしは以下のことを提案する。つまり、あなたがたは、二人ないし三人の人びとがいっしょに話をしている状況では、感情や情動の相互作用が起こっていること、そして、他に重要なことはほとんど起こっていないのが通常である、という結論をできるだけしっかりと心に留めておくべきである」としている<sup>56)</sup>。

この講演は、先に示した「事実への近似的定義」と内容において大きな違いはなく、講演の対象者が、ビジネス・スクールの学生や教員であったことから、やさしく述べたものであるといえる。しかし講演の主張は簡潔明瞭であり、科学方法における二つの問題、つまり事物の相互依存性の問題と感情の問題を中心に科学方法の適用を述べた上で、もう一步踏み込んだものとして、概念枠組の重要性を指摘している。

すでに述べたように、科学の発展は概念枠組に依存しているがゆえに、経験の世界に対していかなる概念枠組を構築するか、ということが決定的となる。その際に、事実に対してつねに近似的にしか接近できず、それゆえに、ヘンダーソンは、対象そのものへの親密な知識を前提とするという経験のもつ意味、そこからの帰納的方法の意義を強調し、そうした上での人間の感情を中心とした相互作用解明への概念枠組構築の必要性を説いているのである。

## 第6節 結びにかえて

これまで、ヘンダーソンがパレートの『一般社会学概論』に出会った1927年から1932年のハーバード・ビジネス・スクールでの講演に至る5年余りの彼の活動を明らかにしてきた。ヘンダーソンにとってのこの時期は、「疲労研究所」の創設および「ソサイアティ・オブ・フェローズ (The Society of Fellows)」の設置に尽力した人生のもっとも意義のある時期であったといえよう。わたくしが、なによりもヘンダーソンのパレート社会学との出会いに着目したのは、1930年代の“Harvard Circle”を考えるにあたって、パレート社会学がその核をなすものであるからである。

もちろん、本稿においてはパレート社会学の内容そのものを問題としたのではない。科学研究の可能性を確信したヘンダーソンが、人間問題への科学的解明において、パレート社会学の何に関心をもち何を強調しようとしたのか、を示そうとした。

---

56) *Ibid.*, p. 326.

1920年代後半のアメリカ経済の後退、そして緊張にはらんだ国際情勢を背景として、ヘンダーソンは政治、社会問題に多くの関心を持っていた。彼の問題意識については後ほど明らかにするとしても、しかし、社会現象を科学として研究することに懐疑的であった彼はパレートに出会い、その科学化への道を確認したのである。ヘンダーソンは人間の感情に基づく行動をいかに科学的につかまえるかに腐心していたのであり、その解決の鍵をパレート社会学に見出した。

われわれは、経験の世界から特定の現象を汲み上げ、それを認識するが、その認識は必ずしも論理的な心の作用だけによるものではない。経験を形作っているさまざまな諸要素のうちの一部によって科学はつくられる。経験は諸要素の相互依存関係からなる有機的過程と捉えられ、科学は、経験を形作っているさまざまな諸要素のうちの一部によって構築されている。それゆえに、ヘンダーソンは科学の絶対性を否定し、「事実への近似」であることを前提としている。

科学は、経験の世界における現象の斉一性の発見によって始まる。「事実への近似的定義」なるがゆえに、どのような斉一性をどのように発見するか、研究者の経験のあり方、つまり、さまざまな心の作用からなる経験がどのように反映されているかが問われることになる。

そして、発見された斉一性を分析する道具が概念枠組であり、言明を導き出す方法が推理である。その際、ヘンダーソンにとって最も重要な問題が感情の問題である。

感情の問題は、第一に研究対象としての具体的な人間行動に結びついている。人間行動の科学研究のために、感情を組み入れた概念枠組を構築しなければならず、ヘンダーソンは、非論理的行動を分析するパレートの「残基」と「派生体」に注目した。

しかし第二に、感情は、研究対象ばかりではなく、研究対象を認識する主体、つまり研究者に侵入しているのであり、ヘンダーソンはこの問題を重視した。彼は「派生体」を排除して科学方法としての健全な推理を強調し、そのために対象への「親密な経験的知識」を認識主体に要求するのである。

こうして、ヘンダーソンは、社会現象としての人間行動と科学研究という人間行動の双方を支配している感情の問題を社会科学構築の中心問題として位置づけ、科学思考の現実可能性にパレートを活用しつつ、大きく踏み出していったのである。

1932年にハーバード大学の社会学科で開設された、いわゆる「パレート・セミナー」で、ヘンダーソンは自らの見解を積極的、かつ精力的に展開することになるのである。このことについては、稿を改めて論じることにしよう。

(1995年10月4日受理)